【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和７年度学校評価 中間評価

様式１(小・中)

達成度（評価）
Ａ：十分達成できている
Ｂ：おおむね達成できている
Ｃ：やや不十分である
Ｄ：不十分である

学校名	多久市立東原庠舎西渓校
1　前年度 評価結果の概要	・学校教育目標達成のために掲げた重点取組については、全体的に目標を達成することができた。次年度は 、校内研究でもある学力向上に特に力を入れていきたい。 ・前年度は、コミュニティスクールとして学校・家庭・地域の連携を深化した。今年度は、児童生徒を主体とした教育活動(学習指導、生活指導、キャリア教育等)を更に推進していきたい。 ・「教職員の働き方改革の推進」については、その要因を分析し、全体で共通理解を図ることで、前年度よりも達成率が少しでも上がるよう改善向上に取り組んでいきたい。 ・「児童生徒の望ましい生活習慣の形成」のために、児童生徒会の自主的な活動を推進し、自発的・主体的に成長していく過程を支援する生徒指導を推進していきたい。 ・目標達成のためには、教職員だけでなく保護者や学校関係者にも自分事として課題をとらえてもらいたい。そのためにも、分かりやすい表現で取組内容や指標を保護者や学校関係者に示し、客観的評価ができるような具体的評価指標を立てる必要がある。
2　学校教育目標	**「ふるさとに学び、志をもち、共に高め合う西渓っ子」の育成**
3　本年度の重点目標	**①校内研究を柱とした学力向上。** **②児童生徒会の主体的な活動の推進。** **③SCや外部機関と連携した教育相談の充実。** **④特別支援コーディネーターを中心とした支援体制の充実。** **⑤学校・家庭・地域と連携した各種活動の推進。**

4　重点取組内容・成果指標　　**中間評価**　　**5　最終評価**

(1)共通評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)		進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	○主体的・対話的で深い学びを意識した授業実践	○「あくしゅタイム」(ねらいに迫る交流の場)で、考えを広げたり深めたりすることができたと回答した児童生徒90%以上 ○授業において、根拠をもって自分の考えを表現することができたと回答した児童生徒80%以上	・全教師が明確な意図をもって「あくしゅタイム」を設定し、その目的と評価を児童生徒に明示することで、「あくしゅタイム」の意義を児童生徒が感じ、意欲をもって実践していくようにする。 ・全教師が、根拠をもとに自分の考えをもつ場を設定した授業づくりの工夫を行うことで、児童生徒が自ら考え学ぶことができるようにする。	B	・「あくしゅタイム」(ねらいに迫る交流の場)で、考えを広げたり深めたりすることができたと回答した児童生徒は83%だった。今後も具体的取り組みを継続していく。 ・授業において、根拠をもって自分の考えを表現することができたと回答した児童生徒は81%だった。今後も具体的取り組みを継続していく。	B	・「あくしゅタイム」を活かして、意欲的に考えを広げたり、深めたりすることができた児童生徒は83%。今後も協働的な学びの場で考えを広げたり、深めたりすることができるような実践を行う。 ・授業において、根拠をもって自分の考えを表現することができたと回答した児童生徒は78%。今後は児童生徒がICT機器を工夫して活用できるようにし、更に自ら考え、学ぶ場を増やしていきたい。	B	・疑問に思ったり、分からないときに調べたり尋ねたりしてすぐに解決する喜びを身に付けることで、自主的な向上心が出てくる。	校内研究主任 （森下・福岡） 学力向上コーディネーター （田中美、森友） 全職員
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○ふれあい道徳参観での感想や学校評価アンケートで「学校は豊かな心の教育に積極的に取り組んでいる」と回答した保護者が90%以上。地域家庭と連携した道徳教育に取り組んでいると回答した教員は85%以上。	・道徳教育に全ての教育活動を通して取り組む。特に、道徳科の授業において、子どもが元気に笑顔で学び合える学校を目指し、豊かな情操と道徳心を培う。 ・家庭、地域と連携して道徳教育に取り組む。 ・県教委制作の人権教育DVD「ジンちゃんケンちゃん」を活用した授業に取り組む。	B	・「豊かな心の育成に取り組んでいる」と回答した保護者は85%、「地域家庭と連携した道徳教育」が当てはまると回答した教員は75%であった。ふれあい道徳では授業への肯定的な意見が多数見られたことから、日々の道徳実践を保護者へ発信していくように努めたい。 ・6、8年生では既に県教委DVD教材を使用して、授業を実施した。	B	・「豊かな心の育成に取り組んでいる」と回答した保護者は86%、「地域家庭と連携した道徳教育」が当てはまると回答した教員は77%であった。 ・全学年でローテーション道徳を実施し、道徳科の授業の改善、充実に努めることができた。ふれあい道徳では、保護者が参観するだけでなく、参加する形の授業が増えた。今後は、釈菜や地域清掃活動といった学校行事を生かした道徳教育を充実させていく。学校配信メールで、道徳だよりを発行するなど情報発信に努めたい。 ・全学年で県教委DVD教材を活用した授業に取り組むようにしたい。	B	・多公教室でも、上級生による下級生への「思いやり」を期待して活動を実施したが、年度後半は上級生に手がかかってしまいなかなか成果が出なかった。心の教育の難しさを感じさせられた1年であった。	道徳教育推進教員 （末次、浪瀬） 人権・同和教育担当 （江口・齋藤）
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめ防止等について、組織的対応ができていると回答した教員が100%	・月に1回生活調査（あくしゅ）アンケートと年2回の教育相談（3年以上）を行い、いじめの早期発見に取り組む。 ・生活支援員の計画的な配置や昼休みの見守り体制を充実させる。 ・生徒指導協議会において、全職員で共通理解を図り、開発的・予防的な生徒指導を行う。	A	・「いじめ防止等について、組織的対応ができている」と回答した教員は100%であった。実際に、今年度はあくしゅアンケートの回答をもとにいじめに発展しそうな事案に丁寧に対応し、未然に防ぐことができた。今後も月1回のあくしゅアンケート等を通して、いじめの早期発見、早期対応をしていきたい。	A	・「いじめ防止等について、組織的対応ができている」と回答した教員は100%であった。月1回のあくしゅアンケート等を通して、いじめの早期発見、早期対応を実施しており、いじめの早期解決につながっていた。ただ、継続して見守る事案や解決に至っていない事案もあり、早期に組織で動く必要性があることを感じた。	A	・いじめも多様化しており難しい面もあるが、受ける側が嫌と思うことはいじめになるので、相手の気持ちになって考える「思いやりの心」を辛抱強く指導してもらいたい。 ・組織的対応がなされているとあるが、個別の事案については、もっと早い段階で対応できなかったのかと残念。	生徒指導担当 （田中昌、小川）
	●◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒95%以上 ◎「『なりたい自分』」のイメージや目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒85%以上	・体育大会や文化発表会をはじめとする行事や各学年で行う体験活動を通して、児童生徒の自主性、自発性を育んでいく。 ・1年間の成長を大切にするために、1年後のなりたい自分を見据え、学期の節目を活用し、学期毎のめあてを明確にさせる。	B	・「先生が良いところを認めてくれる」と回答した生徒は85%であった。学校行事や学級での活動で、活躍の場を与えられ、ほめられたり達成感を得ている児童生徒が多いと思われる。 ・「『なりたい自分』のイメージや目標を持っている」と答えた児童生徒は80%近くいる。後半の学年のまとめの機会を利用して、次年度の目標を持たせたい。	B	・「先生があなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒は84%であった。90%を超えている学年が半数程度あったので、今後も教育活動全体を通してよさを認めていきたい。 ・「『なりたい自分』のイメージや目標を持っている」と答えた児童生徒は77%と目標達成には届かなかった。学年では、低学年の児童は90%を超えていた。中・高学年においても、身近な未来に目を向けさせ、スモールステップで達成感を感じさせる手立てが必要である。	B	・人は本来承認欲求があり、特に子供は家庭でも認められたいので、学校・家庭が一体となって取り組む必要がある。	特別活動部 （松尾、荒木昌）
●健康・体つくり	●「望ましい生活習慣の形成」	●元気のよい挨拶ができていると回答した児童生徒80%以上 ●早寝・早起き・朝ごはんの望ましい生活習慣ができていると回答した児童生徒80%以上	・西渓会(児童生徒会)の活動や教育活動全体において、相手を意識した主体的挨拶を推進する。 ・学級活動や保健だより、給食だよりを発行し、児童生徒及び家庭への啓発活動を行う。	B	・「元気のよいあいさつができている」と回答した児童生徒は81%であった。委員会や、生徒会によるあいさつ運動や、廊下や教室での教員の声掛けが良い効果につながっていると考える。今後も活動を継続していきたい。 ・早寝・早起き・朝ごはんの望ましい生活習慣ができていると回答した児童生徒85%で、今後も継続していきたい。	B	・「元気のよいあいさつができている」と回答した児童生徒の割合が77%と中間報告時より減少した。しかし、学年別では高学年のできている割合は80%を超えている。今後も年上の児童生徒から気持ちのよいあいさつが広まっていくよう取り組みを継続していく。 ・早寝・早起き・朝ごはんの望ましい生活習慣ができていると回答した児童生徒76%で、中間報告より減少した。早寝・早起き・朝ごはんの効果をしっかりと指導していく必要がある。	B	・挨拶について低学年はよくできているが、以前に比べて自分から進んでできる子は減少している。こちらからの声掛けで挨拶ができるが、外部の人間であるからか、高学年は無視する子もいて悲しかった。 ・多公教室を１年間実施し、めあてである「元気なあいさつ」について様子を見ていたが、活動に意欲的に取り組む児童ほど元気にあいさつができていた。やはり意欲が外面に出るのが挨拶だと思われる。 毎朝の交通立哨の菜、自転車通学の生徒が必ず挨拶をしてくれる。また、車中から手を振る児童もいて、逆にこちらが元気をもらっている。	執行部担当 （荒木、志田、田中昌） 食育担当 （三浦、斎藤）
	○安全に関する資質・能力の育成	○児童生徒や教員の交通事故、生活事故の発生件数0(ゼロ)	・集団登校を学期初めに行い、その実施における登下校の安全確認に取り組む。 ・交通安全教室（1～3年：徒歩、4～9年：自転車）の実施により、歩行、自転車の扱いなどへの注意喚起を行う。	B	・全体的には生活事故は0件、交通事故は1件に留まり、おおむね目標を達成できているが、マナーや交通ルールの面では今後とも指導していく必要がある。今年度もバスの乗り方について指導することがあった。 ・後期課程では、自転車の乗り方について、地域の方から注意を受けたこともある。そのため、交通安全教室や集会での指導も継続して行う必要がある。	B	・今年度の交通事故は1件で、マナーや交通ルールの面では今後とも指導していく必要がある。特にバスの乗り方について全体的・個人的に指導することがあった。 ・後期課程では自転車点検を実施しているが、自転車のカギがかかりにくいなど、不備に近い自転車があった。交通安全教室や、集会での指導を繰り返し行う必要がある。	B	・公民館前の交差点でよく児童の下校を見ているが、信号をしっかり守ってわたっている。今後とも事故のない学校であってほしい。	生徒指導担当 （田中昌、小川）
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限45時間以内を守ることができた職員90%以上 ●ライフワークバランスを意識した働き方ができたと回答する教員が90%以上 ●年間20日の年次休暇のうち、職員1人当たりの年次休暇の取得日数14日以上	・ペーパーレス会議の継続、推進。 ・会議の開始時刻、終了時刻の徹底(会議時間60分)。 ・業務に見通しを持つための開錠、施錠時刻の設定と徹底。 ・定時退勤日の徹底(水曜日)。 ・電話対応時間の設定(朝:7:30から、夕:18:00迄)。	C	・職員会議等、会議の多くはペーパーレスで実施できた。休憩時間確保を意識した時間設定は適切だったが、予定時間内の会議終了が徹底できなかった。 ・「定時退勤日の意識と、時間外在校等時間上限45時間以内の遵守」で肯定的な回答は57%、「ライフワークバランスを意識した働き方」で肯定的な回答は75%であった。 ・定時退勤日の遵守や年休取得を進めるために業務体制を工夫してきたが、まだ個人差が大きい。 ・電話対応時間は18:00以降の対応が見られ、夕の設定が19:00頃になることが多かった。	C	・「定時退勤日の意識と、時間外在校等時間上限45時間以内の遵守」で肯定的な回答は58%、「ライフワークバランスを意識した働き方」で肯定的な回答は68%と中間報告時より減少した。 ・年休取得平均が後期課程職員12.8日、前期課程職員12.1日と取得日数に増加が見られた。課題は、取得日数の2極化である。	C	・これは政治の力でAIにするべきであって、現場に任せるものではない。	管理職 （副校長、教頭）
●特別支援教育の充実	○教員の資質向上と支援体制の構築	○特別支援教育に関する専門性が向上したと回答する教員95%以上 ○組織的・機能的な研修会を年間3回以上、ケース会議や支援会議を適宜実施	・校内特別支援教育ミニ研修会を学期に1回、講師招聘の研修会を1回実施する。 ・特別支援教育コーディネーターを中心に必要に応じてケース会議を実施し、校内支援体制の充実を図る。	B	・教員の95%が特別支援教育に関する専門性が向上したと回答した。 ・研修会やケース会議を実施して、困り感のある児童生徒について、共有できた。	A	・教員の95%が特別な支援や配慮を必要とする児童生徒に対して理解が深まり特別支援教育に関する専門性が向上したと回答した。 ・特別支援教育に係る組織的・機能的な研修会やケース会議を実施することで、困り感のある児童生徒について情報共有し、その対応や支援のあり方について共通理解を図ることができたと回答した教員は100%だった。	A	・特別支援教育について、専門性を高め、難しいケースであっても組織で連携を取りながら進めていることを感じた。	特別支援教育 コーディネーター （坂本、浪瀬）

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)		進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○ICT教育の充実	○ICTを活用した児童生徒主体の授業実践	○「４月から12月までに、授業の中でタブレットをどのくらい使いましたか」で1週間に3，4回、ほぼ毎日と回答する児童生徒が80%以上。 ○「子どもたちが自らの判断で自由に端末を活用できる環境を提供している」と回答する職員が70%以上。	・タブレット端末を活用した授業実践 ・デジタル教材を活用した個別最適な学習の推進	C	・授業の中でタブレットを「週3～4回」「ほぼ毎日」使用したと回答する児童生徒が合わせて50%以上にとどまった。デジタル百ます計算や英単語のタイピングなど、毎日取り組んでいるので、引き続き活用する。 ・「子どもたちが自らの判断で自由に端末を活用できる環境を提供している」と回答する職員が70%以上であった。今後も継続していく。	C	・百ます計算や英単語のタイピングに毎日取り組んでいたが、それ以外の授業での活用が不十分であったため、児童生徒の回答は50%のままだった。これからも活用方法を模索していく。 ・子どもたちが自らの判断で自由に端末を活用できる環境を提供できた職員が84%以上という結果であった。これからも授業の中で端末を活用できるよう、研修を行いたい。	C	・家庭でもPC、スマホ、タブレットは触れる機会が多くなっており、学習に使える便利な物なので適切な使い方を徹底し、身近に活用させることが必要だと思う。 ・諸外国では、デジタルよりも紙の教科書の方が理解が深まる等の結果も示されている。AIの進化も加速し、それに現場がついていくことができるのかは予想がつかない。	教育情報化推進リーダー （岩本、南）
○コミュニティ・スクールの推進	○学校・家庭・地域と連携した各種活動の推進	○授業などで家族や地域の人と一緒に学ぶ活動が行われていると回答した児童が90%以上 ○家庭・地域と連携した教育活動が行われていると回答した職員が100%以上	・多久学を中心に「恕の心、ふるさと多久を愛する心」を育むための授業や活動を、全クラスで計画的に単元を仕組んで実践する。 ・児童生徒が地域の人とのつながりを実感し、感謝の心をもつことができるように、地域の人や保護者に学習支援ボランティアや外部講師を依頼するなど、連携した活動を推進する。	C	・授業などで家族や地域の人と一緒に学ぶ活動が行われていると回答した児童は79%であった。活動自体は各学年で計画的に実施しているため、活動内容の工夫を行っていきたい。 ・家庭・地域と連携した教育活動が行われていると回答した職員は79%であった。年度後半にも地域の外部講師を招聘予定である。	B	・授業などで家族や地域の人と一緒に学ぶ活動が行われていると回答した児童生徒は76%だった。教育講演会では、地元出身の方を講師に招いて「夢」について語ってもらうなど、地域とのつながりを大切にしながら、児童生徒に深く印象に残る、学校の教育目標とも連携した活動を行うことができた。 ・家庭・地域と連携した教育活動が行われていると回答した職員は100%だった。CSフェスタや論語検定など、地域の人と一緒に学ぶ機会を計画して、定期的に行うことができた。	B	・保護者だけでなく、地域の人とも学ぶ機会は学校にも地域の人にとっても有意義であるが、まだ地域に浸透していないようである。論語や九九のチェックも協力者がもっと増えるとよいと思った。 ・この地域は、学校も各諸団体もつながりの重要性を認識しており、それがCSフェスタ等で生かされていたと思う。	義務教育学校教育 コーディネーター （田中美、森友） 学校運営協議会担当 （副校長）

●・・・県共通　○・・・学校独自　◎・・・志を高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	・学校教育目標達成のために掲げた重点取組(③④)について、目標を達成することができた。次年度もいじめの早期発見、早期対応や特別支援教育に組織的に取り組んでいきたい 。。 ・B評価の項目のうち、「学力の向上」については、今年度の校内研究の取り組みを継続し、学力向上に更に力を入れていきたい。 ・C評価の項目である「教職員の働き方改革の推進」と「ICT教育の充実」については、その要因を分析し、全体で共通理解を図り、対策を検討し、実践することで今年度よりも達成率が少しでも上がるよう改善向上に取り組んでいきたい。 ・目標達成のためには、教職員だけでなく保護者や学校関係者にも自分事として課題をとらえてもらい、協力をお願いしたい。そのためには、取組内容や指標を保護者や学校関係者に分かりやすく示し、客観的評価ができるような具体的評価指標を立てる必要がある。